

イエスはガリラヤで、神の国の宣教を語り、病気を癒したり、悪霊を追い出すという奇跡を行っているという噂が、イエスの身内の人たちに伝わって来ました。そこで、彼らはイエスが気が変になったので、取り押さえて家に連れて帰らなければ、と思いました。なお、マタイ福音書、ルカ福音書の著者はイエスの家族の名誉のために 21 節を省いています。ところで、イエスの時代、悪霊は人間に取りついて様々な病気や障がいを引き起こすと考えられていました。律法学者たちはイエスは悪霊の頭ベルゼブルの力で人々から悪霊を追い出している、と言っていたのです。この判断が権威あることが律法学者たちがエルサレムから下って来た者であると記すことによって強調されています。

「あの男はベルゼブルに取りつかれている」という言葉は現代の私たちには違和感を覚えるかも知れません。しかし、自分に敵対する人たち、またその人たちの何か計り知れないような力を感じる時、現代でもそのような言葉が発せられています。私たちが悪魔とか悪霊を持ち出すのは、結局は自己正当化です。自分が分かっているならば、どんな相手、状況だろうと、冷静に対処できるはずですが、また、律法学者たちはイエスによって悪霊からの解放という救いの業が行われていることを一方で認めながら、その一方でイエスを信頼し、従うことを拒んでいます。イエスの本当の姿を見誤っていることでは、身内の人たちも律法学者たちも同じなのです。イエスはそのことに対して譬えをもって答えました。イエスは悪霊の追放はサタンの内輪もめではない、と言います。

27 節の譬えはイエスの働きを暗示しています。イエスによって強い人、サタンは縛り上げられ、その家財道具、サタンに捕らわれている人たち、は、家の主人サタンから解放されるのです。イエスは悪霊に取り憑かれた人から悪霊を追い出したり、病を癒したりして、それらの人を社会に復帰させました。そのことによって、神の国(神さまの支配) が私たちのところに来ていることを示したのです。イエスにおいて起っているのは、神さまによって創られ、生かされ、守られている本来の自分を取り戻し、神さまを信頼し、従い仕える者とし、神さまと共に歩む者になることなのです。それは 1:15 のイエスの宣教の言葉を人々に示すことでした。その内容は、神の国はある意味でもう始まっている、だから、自分のすべてを神さまに向け直し、この神の国の到来のメッセージに信頼を置き、そこに自分を委ねていきなさい、ということなのです。